第5章　総 括

梅田萱峯遺跡２区からは弥生時代中期後葉の竪穴住居(建物)跡３棟、掘立柱建物跡２棟、段状遺構１棟、土器棺墓１基、貯蔵穴２基、土坑11基、ピット45基、７世紀中頃から７世紀後半代の製炭土坑１基を検出した。広域農道を挟んだ１区とは同一集落と考えられ、平成17・18年度調査成果分を合わせると竪穴住居(建物)跡14棟、掘立柱建物跡２棟、段状遺構４棟、貯蔵穴11基、土坑56基、土坑墓・木棺墓・土器棺墓16基、土器溜り４ヶ所、ピット179基となる。

２区から出土した遺物は縄文土器１点を除き、すべては弥生時代中期後葉に該当するものであり、旧石器・縄文時代から古代の遺物が出土した１区とはやや様相を異にしている(註１)。また、南西方向の尾根部に当たる３区では縄文時代の可能性を持つ落し穴７基が検出されており、１・２区の尾根部は合わせてわずか３基に留まる。このことから縄文時代から弥生時代前期の土地利用は低調であったことがわかる。２区で本格的な居住が始まるのは弥生時代中期後葉であり、竪穴住居(建物)、掘立柱建物、貯蔵穴、土坑から構成される。なかでも１区では見られない掘立柱建物跡が２区では２棟確認されていることは注目されよう。３区ではⅣ－2・3期に比定される独立棟持柱付掘立柱建物を含む４棟が尾根頂部で築かれているが、２区ではこれに先駆けてⅣ－1期で認められるからである。立地は竪穴住居(建物)から４～５ｍ離れた丘陵平坦面であり、集落内の空間分節によって計画的に配されていたと考えられる。さらに、墓域の一角を示すと想定される礫群や土器棺墓SX16が調査区北半の１区寄りから検出されていることから、墓域を挟んだ居住域・貯蔵域といった集落景観の一端を明らかにできたことは重要な成果といえよう。土器棺墓は円礫と柱状礫を標石として下部に口径33.8cm、器高61.7cmの壺が土坑掘り方を覆うように埋設されていた。県内における弥生時代中期の土器棺墓の事例として長瀬高浜遺跡SXY01、東宗像遺跡第１号土器棺墓が知られているに過ぎず、本例は１個体の土器を割って土坑の蓋として使用した後者に近い(註２)。本遺跡からは、これまでに木棺墓13基、土坑墓２基が確認されているが、墓坑形態や標石の有無などが多様なあり方を示している(註３)。新たに加わった土器棺墓によってもその見方は可能であり、さらに南に拡がる可能性が高い集落全体の様相が明らかになった後、再度検討を行いたいと考えている。

出土遺物からみた２区の特性として、SI12において1区では見られなかった管玉製作に伴う資料が出土していることが挙げられよう。本遺跡ではⅣ－1期には玉作りが始まっていたことを示し、Ⅳ－2・3期に形成される３区へと継続している。また、住居跡の周囲に小型の土器廃棄土坑が点在していることも興味深い事例であり、これらが何を示すのか今後の検討課題である。

以上、梅田萱峯遺跡２区の調査成果の概要をまとめたが、今後予定されている南側丘陵部の調査によってさらに当該期の集落像が具体的に描けるものと思われる。

【参考文献】
1）高尾浩司・淺田康行編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書11　梅田萱峯遺跡１』鳥取県埋蔵文化財センター
湯村　功・小口英一郎・濱本利幸編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書16　梅田萱峯遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター
2）吉田　学2000「山陰東部における古墳時代の土器棺、土器棺墓の様相」『大山町埋蔵文化財調査報告書第17集　妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅳ＜洞ノ原・松尾城地区＞』鳥取県大山町教育委員会
3）註１報告書参照。